

# 音声学的アクセントと 音韻論的アクセント

城生佰太郎

【キーワード】

音声学的アクセント    アクセント記述    モーラ  
音声学的音節    学習者の母語別日本語教材

## 1. はじめに

暗黙の了解として、わが国の日本語教育において「アクセント」といえば音韻論的レベルか、またはせいぜい音韻論的レベルを中核にすえて音声学的レベルをも多少は加味するといった程度の記述が主流である。このことは、日本語を母語とする人々や、日本語を熟知している外国人などを対象としている限り、はなはだ簡素化されており、全体を体系的に俯瞰（ふかん）するという目的においては簡便な方法であると言えよう。

しかしながら、日本語をこれから学習しようとしている人たちにとっては、著しく情報が不足しており、不親切極まりないところが目につく。たとえば、「男」という単語のアクセントは音韻論的には核（下がり目）がないので「無核アクセント素」と称されるが、この呼称が災いしてか、中には「アクセントがない」などと表記される教科書類が出現したり、あるいは日本語教育の現場でそのように教えられたり、というような形で実害を撒き散らしている。

これでは、日本語教育における音声は、ますます不評を買うことになりかねない。真の意味での国際化をめざすならば、日本語を知っている人たちの間だけで通用するような、いわば「仲間内ことば」を極力排除しなければならぬ。この点において、日本語教育が取るべき基本姿勢は、音声学や言語学、日本語学など隣接科学における研究成果をそのままの形で受け入れるのではなく、あらたに日本語教育の目的にかなった形に「鋳直す」ことにほかならない。

本稿は、以上の目的に迫るために、従来の音韻論一辺倒であったアクセント教育に対し、音声学的観点からのアクセント教育を施すことの有用性を訴えるものである。

## 2. 音声学的不アクセントと音韻論的不アクセント

城生 佰太郎 (2008:127) によると、音声学的不アクセントとは、

単語レベルの音節間に相対的に備わっている、知的意味(客観的な意味)を反映した、高低・強弱・長短など音の量的変化に関する社会習慣的なパターン

と、定義される。「音の量的変化に関する社会習慣的なパターン」ということになれば、およそ世界中のすべての言語に、音声学的不アクセントは実在することになる。

たとえば、隣国の言語である韓国語(ソウル方言)には、「アクセントがない」などといわれているが、これに対しても「音声学的不アクセント」ならば実在する。その証拠を挙げれば、ソウルの人たちに向かって「頭」のことを [ʃmoʔni] と発音すると、いっせいに「違う!」というリアクションがえってくる。これに対して、[ʃmoʔni] とすれば誰も違和感を示さない。つまりは、この単語には [ʃ○]○ (HL) という固有の不アクセントが、社会習慣的なパターンとして備わっているということなのである。だからこそ、私たち外国人が少しでもネイティブ・スピーカーに近い発音をしようと努力する際には、この単語に備わっている音声学的不アクセントが [HL] であるという情報が不可欠になるというわけである。くどいようだが、このような場面で音韻論的観点に立った「韓国語(ソウル方言)にはアクセントがない」などという情報は有害無益である。

日本語教育の現場で、高頻度で頼られているアクセント辞典類も、例外なく音韻論的観点からアクセントを表記している。このため、たとえば「コーヒー」のようなきわめて日常卑近な単語の不アクセントが、

コーヒー /LHHL/

のようになっている。しかし、日常生活の場面では「コーヒー」を /LHHL/ のように発音することはほとんどない。たとえば、ものすごい騒音で発音が聞き取れないような場面とか、子供や外国人に1音1音丁寧に発音してみせるといような特殊なケースを除外すると、アクセント辞典のようなパターンが出る可能性はきわめて低いと言わざるを得ないのである。

---

1 角カッコ内は国際音声記号。アクセント表記の意味するところは、○ = 低平ら、ʔ = 高平らである。

ということは、そもそも音韻論的記述というものがめざすところと、日本語教育がめざすところが大きく乖離（かいり）しているということに思い至らなければならないということにほかならない。音韻論的記述は、理想化されたアクセントパターンだけを捉える。理想化されたということは、数ある現実の発音の中からコアとなる部分のみを抽出して抽象化したということなので、現実の発話そのものからは遠く隔たってしまうのが一般的なありかたになる。要するに、現実的にはほとんどありそうもないケースを捉えたものが音韻論的記述であるとさえ言いうる一面を持つ。これでは、何よりもまず自然度の高い現実的な発音に関する情報が不可欠である日本語教育の現場とは相容れない。したがって、ここに従来のアクセント辞典とは別に、実情に即した「音声学的アクセント辞典」が必要となる道理が見えてくる。そのような辞典が完成すれば、先にあげた「コーヒー」は、次のようになるだろう。

コーヒー /HHHL/

同じようにして、「東京」「とんぼ」「散歩」「いっそう（一層）」など、いわゆる「引き音」「ハネ音」「ツメ音」などが語の第1音節（モーラではない点に注意）に立つと、いわゆる natural speed と呼ばれる、日常的で早くぞんざいな発音のスタイルでは、一般に平板式平板型とされているアクセント型に /HHH…/ などが実現する機会が多い。こうなると、もう教科書に書いてある「東京のアクセントは1拍めと2拍めとで、必ず高さが違う」などとは言い切れなくなってくるのである。

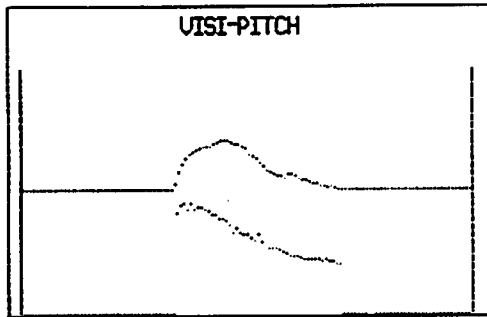
さらに、「僕の」のアクセントは /HLL/、「うち」のアクセントは /LH/ だということは辞典類でわかる。しかし、これらが複合して「僕のうち」になるともはや2つを単純に足し合わせた /HLLLH/ にはならず、あらたに /HLLLL/ となる傾向にある。これは、一種のアクセントレベルにおける同化現象と考えられるが、日常では分節音のほうももっと崩れて「ぼくんち」になることだってしばしばある。こうなったら、アクセントは間違いなく /HLLL/ となる。しかし、このような情報は辞典類には記されていない。書き言葉に関しては、単語以上のレベルを扱った慣用句、表現、文などの辞典類があるのに対して、音声言語に関する辞典類はまだまだ問題にならないくらい乏しく、また国際音声記号をつけた真に国際的な辞典も、筆者たちによる城生佰太郎・佐久間まゆみ編(1996)を除けば、1冊も存在しないというのも、先進国としてはかなり問題である。

### 3. 国際音声記号(IPA)によるアクセント表記

日常性の高い音声学的アクセントを拾うと、これまでの辞書類では考えられなかったような問題もおこる。そのひとつが、高さの段階に関する問題である。従来のアクセント表記は、くり返し述べてきたように音韻論的レベルを基調としてきた。したがって、高さの段階も普通は強引に2段に押し込めてきた。たとえば、「こうもり」のアクセントは、

コーモリ /HLLL/

というのである。しかし、言語事実のほうはそれほど単純ではない。たとえば、KAY社の音響解析ソフト VISI-PITCH を用いて上に挙げた「こうもり」のアクセントを音響音声学的に解析すると、次に示す図1のようになる。



上段は intensity、下段は pitch をあらわす。城生侑太郎 (2008:137) より転載

図1 「こうもり」のピッチ下降動態

図からわかることは、「こうもり」の高さは絶えず下降に向けて変動を遂げているということである。従って、このような連続体(ピッチ下降動態)を少しでも現象に近づけて表記しようとするれば、音声学的レベルから IPA などの表記を用いる以外に方法はないということである。結果は、次のようになる。

[Nk<sup>h</sup>oː-ɫmoːɾi]

つまり、辞書類のほとんどで採択されている音韻論的レベルからのアクセント表記である

では、特に後半の「一モリ」の部分がすべて等しく[低低低]として扱われている点が問題なのである。

そこで、この点を克服する一つの方法は、高さの段階を2段から3段に増やすことである。具体的に述べれば、先のデータでは第1音節をHからMにかけての下降とし、第2音節をMとし、第3音節をLとすれば、ほぼ音声学的実態に近い表記ができることになる。すなわち、以下のようになる。

### コーモリ [H<sup>m</sup>ML]

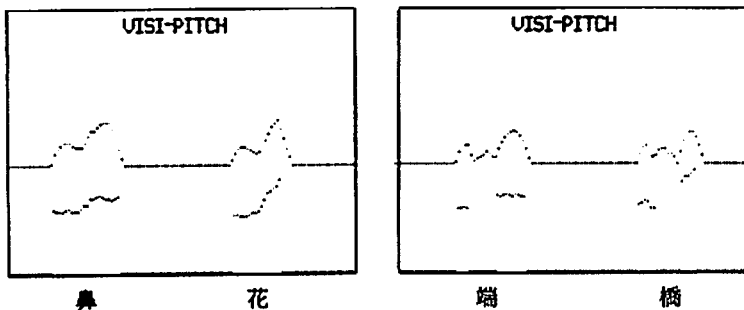
なお、上の表記はすべて音声学的であり、音節に関しても音声学的音節を採択している。また、初頭のHが太字になっているのは、この音節が途中で下降を伴う長音節であることを示す<sup>2</sup>。さらに、Hの右肩に1/4角で添えてある「m」は、初頭から第2音節にかけてHからMレベルに向けて下降することを示す。

アクセント表記の枠組みを、従来の2段から3段に増設することは、上に述べた現象を記述する以外にも、次のような事実を無理なく記述できるようになる点でメリットがある。すなわち、古来より議論されてきた「鼻」と「花」、「端」と「橋」などに見られる第2音節の扱いである。

従来の表記法では、おおむね「鼻、端」= /○○/、「花、橋」= /○●/とされてきた。本来、/○/は無核、/●/は有核と音韻論的に約束されていたのだが、これを音声学的レベルに置き換える際に/○/=低、/●/=高、と単純化されることもしばしばあった。こうなると、「鼻、端」の類には「アクセントがない」という奇怪な解説が教科書類で踊り狂うこととなる。さらに、「鼻、端」の類が/○○/と表記されることによって、初級の日本語学習者には第1音節の「ハ」と第2音節の「ナ、シ」が同じ高さとして実現するのではないかという誤解を与えてきたということもまた困ったことであった。

図2に、先に述べたものと同様の装置を用いて、音響データを示す。

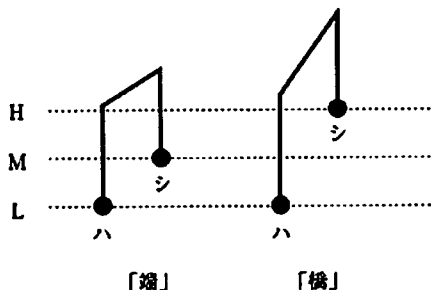
2 ちなみに、いわゆる「引き音」「ハネ音」「ツメ音」を伴う音節を長音節、それ以外を短音節と呼んで区別する。



城生佰太郎 (2008:139) より転載

図2 VISI-PITCH で捉えた平板型と尾高型アクセント

それぞれ対になっている左側が平板型、右側が尾高型になっているが、いずれの場合も相対的に左側における第2音節の pitch の上がり方が、右側に比べて低めに抑えられていることが目視によっても十分に確認できる<sup>3</sup>。したがって、このような事実を根拠として、筆者は図3に示す「3線譜」を、日本語教育におけるアクセント練習で提案している。



城生佰太郎 (2008:142) より転載

図3 日本語アクセント練習用の「3線譜」

3 心理学や音響学などでは、定量化と統計処理が不可欠とされている。しかし、フランスのルスロによって創始された実験音声学では、目的とするところが相対的な差異にある。したがって、常に定量化と統計処理が不可欠だというわけではない。それぞれの学問には、多様な目的がある。このことを、特に心理学系の研究者に警告しておく。

#### 4. モーラと音声学的音節

中国人に「塔」「豹」「妙」…などのアクセントを修得させる際に、従来の日本語教育が取ってきた方法は、一般的にこれらを例のごとく音韻論的レベルから捉え、モーラ単位でバラバラにした上で「塔」は高い音調を有する /ト/ + 低い音調を有する /ー/、「豹」は高い音調を有する /ヒョ/ + 低い音調を有する /ー/、「妙」は高い音調を有する /ミョ/ + 低い音調を有する /ー/ …などとするものであった。

しかし、これは当の中国語母語話者にとっては極めて迷惑なはなしであった。なぜなら、中国語という言語は、世界に冠たる音節言語であるからだ。すなわち、音節ごとに声調と呼ばれるアクセント・ボタンがしっかりと貼りついているのである。だからこそ、音節をさらにバラしてモーラにし、そのうえそれぞれのモーラごとに固有の音調を付与せよなどと要求されると、おそらく頭の中は真っ白になり、なにがなんだかわけわからぬ状態に追い込まれることとなる。これでは、あまり感心した教授法とはいえない。

そこで、考えられるのが、そもそも日本語をモーラのレベルだけで捉えることをやめ、あらたに音声学的音節のレベルからも捉え直そうという提案である。たとえば、「塔」は [to:] という1音節のままでもとらえ、これ以上分割しない。また、アクセントもこの1音節全体に対して「高からの下降音調 = HF<sup>4</sup>」とする。あたかも、中国語(北京)の第4声のようなとらえかたとなる。

具体例を少し加えておくと、「十日」のような上り音調の場合はまずこれを [to: ka] という2音節語としてとらえ、第1音節を「低からの上昇 = LR<sup>5</sup>」、第2音節を「中の平ら = M<sup>6</sup>」として分析すればよい。ちなみに、このようなとらえかたをすれば、第1音節は中国語(北京)の第2声のようなタイプとなり、中国語母語話者にとっての違和感を低減することに役立つ。

なお、城生佰太郎(2008:140-141)からの引用によって、従来のモーラ(または拍)一辺倒の日本語学から脱却して、音声学的音節レベルで若干の具体例を示すと以下に示す表1のようになる。

---

4 HF は、high falling の略号である。

5 LR は、low rising の略号である。

6 前節で述べたように、音声学的アクセントを施すと、従来「平板型」と呼ばれていたものの第2音節以下は M 音調となる。

表 1a 1 音節語

長短の別	語 例	アクセント
短	火、木…	[1]
	日、気…	[1]
長	約、缶…	[V]
	表、勘…	[A]

表 1b 2 音節語

長短の別	語 例	アクセント
短短	箸、肩…	[11]
	花、型…	[11]
	鼻、竹…	[11]
短長	20、自身…	[1V]
	砂糖、五人…	[1V]
	二重、自信…	[1A]
長短	監事、センス…	[V1]
	漢字、扇子…	[1A]
	道具、ゆうべ…	[11]
長長	千人、安産…	[VV]
	専任、暗算…	[1A]
	仙人、方言…	[1V]



表 1c 3音節語

長短の別	語例	アクセント
短短短	東 <sup>ダウ</sup> (固・名)、木 <sup>キ</sup> の実…	[14J]
	干菓子、熱い…	[41J]
	男、絡み…	[411]
	ネズミ、この実…	[141]
短短長	レスラー、キャラバン…	[14N]
	白米、無器用…	[41N]
	履くまい、めめしい…	[41V]
	横町、ガリ版…	[144]
短長短	素人、狩人…	[1NJ]
	山茶花、仲人…	[4NJ]
	弟、妹…	[411]
	茶だんす、ペランダ…	[1J4]
短長長	アカンベェ、トビーさん…	[1NJ]
	魔法ピン、異邦人…	[4NV]
	日本人、ディナーショウ…	[41V]
	赤ん坊、社交性…	[1J4]
長短長	本屋さん、コースター…	[14V]
	大所帯、等時間…	[41V]
	ローズティー、そうらしい…	[47V]
	開化井、インシュリン…	[444]
長短短	蝙蝠、千曲…	[41J]
	雰囲気、選挙区…	[41J]
	用足し、道楽 <sup>ダウ</sup> …	[411]
	ワープロ、選曲…	[444]
長長短	東大寺、ハンティング…	[1NJ]

	誕生日、展望車…	[A1]
	三番目、ズーミング…	[A11]
	寛大さ、抽象画…	[A44]
長長長	93、安藤さん…	[N4]
	運動会、コンピューター…	[A4]
	騒々しい、EEC…	[A4]
	ばんそうこう、東京堂…	[A4]

フランスでは、外国人のためのフランス語教育教材に多様性がある。たとえば、スペイン語母語話者向けのフランス語教材と、中国語母語話者向けのフランス語教材とは異なるコンセプトによって編纂されている。理由は、学習者の母語による影響を重く見ているからにほかならない。これにひきかえ、わが国では日本語教材を学習者の母語別に編纂しようなどという発想さえない。むしろ、「教科書だからこそ、統一的な内容でないと試験対策上問題がある」などという、非言語学的理由が優先されて、なかなか筆者のような立場からの提言が受け入れられない環境が強固に築かれている。しかし、真の国際化を考えると、母語話者別の日本語教育教材の開発は、避けては通れない重要な課題であることを強く訴求しておく。

#### 【参照文献】

城生佰太郎・佐久間まゆみ編（1996）『右脳を刺激する日本語小辞典』、東京書籍

城生佰太郎（2008）『一般音声学講義』、勉誠出版

（本学教授）